

放送大学における公認心理師教育の意義について — 心理演習・心理実習の現状 —

北原知典¹⁾、波田野茂幸²⁾、伊藤匡³⁾、桑原知子⁴⁾

The significance of certified public psychologist training
at the Open University of Japan.
- Current status of psychological seminars and training -

Tomonori Kitahara, Shigeyuki Hatano, Masaru Ito and Tomoko Kuwabara

要 旨

本稿では、放送大学における公認心理師養成教育、特に心理演習および心理実習の教育実践について検討した。具体的には、心理演習・心理実習の授業内容、構造、および教授方略を詳細に記述するとともに、受講学生へのアンケート調査を通してその教育効果を検証した。公認心理師制度の施行以降、学部段階で実習科目が必修化されたことに伴い、本学でも多様な学生を対象とした独自の教育体制を構築してきた。本学の実践は単なる資格取得のための教育にとどまらず、学生が他者と触れ合い、自らを省察し、心理臨床を志す覚悟を深めていく教養教育的性格を併せもつことが示唆された。また、多様な背景をもつ社会人学生が互いに学び合う協働的学習環境が、心理支援に不可欠な「個別性理解」や「省察的態度」の形成に寄与していることが確認された。さらに、心理演習と心理実習が連動した二重循環型の経験学習構造を形成し、成人学習者の熟達過程の初期段階を支える教育モデルとして機能していることが示された。以上より、本学の「放送大学方式」に基づく公認心理師教育は、標準化された制度的枠組みの中においても、成人学習者の多様性と省察を重視する独自の臨床教育モデルとして意義をもつと考えられる。

ABSTRACT

This paper examines the educational practices of the Open University of Japan in training Certified Public Psychologists, with a particular focus on the Psychological Seminar and Psychological Practicum. The study describes the structure, content, and pedagogical strategies of these courses and evaluates their educational impact through a questionnaire survey administered to enrolled students. Since the implementation of the national licensing system, practicum-based courses have become compulsory at the undergraduate level, and the university has developed a distinctive framework to accommodate its diverse population of adult learners.

The findings suggest that the program extends beyond qualification-oriented training and incorporates a liberal-arts dimension in which students engage with others, reflect on themselves, and cultivate the commitment necessary to pursue clinical practice. The collaborative learning environment, shaped by students with varied professional and life experiences, contributes to the development of essential clinical attitudes, including understanding individual differences and adopting a reflective stance.

Furthermore, the integration of the Psychological Seminar and Psychological Practicum forms a dual-cycle experiential learning structure that supports the early stages of professional development among adult learners. Overall, the "Open University model" represents a meaningful and distinctive form of clinical education that values learner diversity and reflection while meeting standardized national requirements for Certified Public Psychologist training.

¹⁾ 放送大学教授（公認心理師教育推進室）

²⁾ 放送大学教授（公認心理師教育推進室）

³⁾ 放送大学准教授（公認心理師教育推進室）

⁴⁾ 放送大学特任教授（公認心理師教育推進室）

1. はじめに

2017年に施行された「公認心理師法」に基づき、「公認心理師」という新たな国家資格ができた。放送大学(以下、「本学」と略記)では、この資格を取得するための「学部段階カリキュラム」に対応することとなり、法律で定められた「大学における必要な科目」が開講され、この資格取得をめざす学生が多数受講している。

なかでも、面接授業である心理演習・心理実習は、多くの学生が受講を希望しているが、実際に学外の施設(病院などの医療領域、学校や教育センターなどの教育領域、少年鑑別所などの司法領域、会社などの産業領域、児童心理治療施設などの福祉領域)に見学に行くため、受講人数が30名に制限されている。本学では、そのため「心理演習・心理実習受講のための選考試験」(以下、「選考試験」と略記)を行っており、2026年度開講にむけての2025年の出願倍率は15.2倍となっている。

1.1 資格のための教育

一般には、資格をもっているということが専門性を担保し、十分な能力をもっていることが保証されるとみなされるだろう。ただ、心理臨床の領域においては、資格をもっているということが「ゴール」ではなく、ただの「出発点」にすぎない。心理臨床が対象とするのは要心理支援者という「人」であり、また抱えている悩みやその人がおかれている状況がさまざまに異なるため、マニュアル化されるような対応では十分ではないからである。心理臨床の領域では、資格をもったうえで体験を積み重ねる努力を行う必要がある。

したがって、本学の公認心理師学部段階カリキュラム(以下、「本カリキュラム」と略記)、特に心理演習・心理実習では単に「資格を取得するための授業」ではなく、「優れた心理臨床家になるための授業」を行ってきた。「優れた心理臨床家」になるためには知識の習得だけではなく実践の場で自ら考え主体的に対応する能力を養わねばならない。また、自分自身と向き合い、悩み、深く考えながら、心理臨床という「道」を歩む覚悟の醸成に努める必要がある。

本稿では、本学における心理演習・心理実習の授業において、どのような授業が展開され、上述したような「優れた心理臨床家」を育てるためにどのような工夫がなされているのか、それを紹介したうえで、実際に学生にとってこれらの授業がどのような体験となっているのかを検証したい。

1.2 「放送大学における」資格のための教育

本学では入試がなく、生涯教育として広く教養を身につけることが目指されている。一方で、「資格取得」は専門性を追求する方向性をもっており、この両者は必ずしも方向性が一致しているとは言えない。この両者、すなわち「教養教育」と「資格取得」は、どのように両立しうるのだろうか。

心理演習・心理実習の受講を希望し、難関の「選考

試験」をも受験したいという学生は、公認心理師という「資格取得」を強く望んでいると考えられる。ただ、それだけであろうか。通学制の一般の心理学専攻の学生であれば、臨床心理学に興味をもち、それに関連した仕事に就くことを目指して、そのために資格取得をめざすことが多いと思われる。

しかし本学の学生は有職者が多く、すでに仕事に就いていることが多いことから考えると、単純に「仕事のために資格がほしい」という動機付けだけとは限らない。一方で、すでに就いている仕事は教員、看護師、理学療法士、公務員など多岐に亘るが、それをやめて心理臨床の仕事に新たに就くかどうかは、低いハードルではなくある種の「決断」を必要とすると思われる。つまり「資格をとる」ということについて通学制の学生とは異なった状態にあると言えるだろう。

さらに、公認心理師の資格取得のためには、学部段階のカリキュラム修了だけでなく、大学院に進学しなくてはならないが、本学では大学院対応はしていないので、他大学の修士課程を受験する必要がある。仕事をもちながら、この道に進むかどうかを決めていくためには、単に授業を受けるというだけでは不十分であり「ほんとうにこの道に進んでいいのか」を考え、さらにそのために、「心理臨床は何をするものなのか」ということについての、正しく深い理解が必要となろう。したがって、本学における資格取得のための授業においては、これらのことを考える「場」と「時間」を提供する必要がある。

ここに至って、「教養教育」と「資格取得」はバラバラの道ではなく、重なりがみえるように思われる。つまり「自分とは何か」「いかに生きるか」という問いに向かっているからである。

心理演習・心理実習はこのような問題意識をもって開講されてきたが、学生自身はどのように考えているのか、本論文においては、この点についても検討を加えたいと考える。

1.3 本論文の目的

- 1) 本学における心理演習・心理実習の授業において、どのような授業が展開され、「優れた心理臨床家」を育てるためにどのような工夫がなされているのか、それを紹介したうえで、実際に学生にとってこれらの授業がどのような体験となっているのかを検証する。
- 2) 本学における心理演習・心理実習の授業において「自分自身について考え」、さらに「心理臨床は何をするものなのか」ということについて、正しく深い理解ができるよう、これらのことを考える「場」と「時間」が提供されてきたかを検証する。

2. 公認心理師教育の実際

2.1 心理演習

2.1.1 本学における心理演習の定義

「公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公

認心理師となるために必要な科目の確認について（以下、「法律」と略記）」(2024)において、「心理演習」は以下のように示されている。

知識及び技能の基本的な水準の修得を目的とし、次の（ア）から（オ）までに掲げる事項について、具体的な場面を想定した役割演技（ロールプレイング）を行い、かつ、事例検討で取り上げる。

- （ア）心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得
 - （１）コミュニケーション
 - （２）心理検査
 - （３）心理面接
 - （４）地域支援等
- （イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成
- （ウ）心理に関する支援を要する者の現実生活を視野に入れたチームアプローチ
- （エ）多職種連携及び地域連携
- （オ）公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解

これらを元に、本カリキュラムでは心理演習を以下のように設定した。以下、心理演習のシラバス（2025）より抜粋する。

「心理援助職として必要とされる心理面接や心理検査の実際および対人コミュニケーションの取り方に関する基本的な知識や技能を習得すること、そして、多職種連携および地域連携の意義やその方法および現状を理解することを目指しています。あわせて、臨床現場で要支援者と関わる際に意識的に遵守しなくてはならない職業倫理や法的義務および社会人として求められる社会マナーについて、説明および実践ができるよう理解を深めていきます。」

以下には、上記抜粋部分を要約しながら「本学における心理演習の定義」について述べる。

冒頭にある「心理援助職として必要とされる心理面接や心理検査」に関しては、その「基本的な知識や技術の習得」が通学制であれば学部4年間を通じて行われるものであるが、本カリキュラムではそれらと同等の時間を確保することは難しい。ただし、本カリキュラムに在籍する学生は印刷授業や放送授業および単位認定試験を通じて「基本的な知識や技術」を「習得」していることが前提となっているため、演習内ではその「実際」について知ること、つまり、どういった心理面接・心理検査が実際の臨床場面では使われているのかを念頭に置いて指導を行ない、通学制と同等の教育を質量ともに確保している。また、心理演習で学んだ「実際」が心理実習の際に赴く臨床現場でどのように行われているかを確認するための事前・事後学習としての役割も担っているといえよう。

続く「対人コミュニケーションの取り方に関する基本的な知識や技能を習得すること」に関しても、先述のように通学制に比して十分な時間を確保するのが難しい。しかし、通学制ではおおよそ20歳前後の学生が

集まり心理臨床を学ぶのとは大きく異なり、本学にはさまざまな年代、学歴、職種の学生が集っている。それはつまり、さまざまな考え方や背景を持つ学生が一堂に会していることを意味する。勿論、本カリキュラムの学生も広く心理臨床を学ぶために集まっているわけだが、先述のようにそもそもの「学歴」が学生によって異なる（心理臨床を学んできたものの方が少ない）ので、等しく心理臨床を教授・指導してもその捉え方や理解の仕方は、学生によって相当のばらつきがある。だからこそ「基本的な知識や技能」に関しては、教員側も十分注意をして指導を行う必要があるが、「習得」に関しては、むしろ学生間のコミュニケーションを最大に活かし、様々な考え方があることを体験してもらうことによって、通学制大学にはない学びが得られるであろう。その意味で言うと、教員が最も重要視しているのは、他者と触れ合う機会をたくさん持つことで「自分自身について考え」、それを通して「人によって考え方が違う」更には「他人のことは簡単には理解できない」ということを体験してもらうことで「心理臨床は何をするものなのか」について考える機会を多く設けることだといえる。

2.1.2 授業の内容

本節では実際の授業がどのように行われているかについて報告する。

本カリキュラムでは心理演習に4日間を充て、それを当該年度の4月中の連続する2日間（前半）と翌年1月中の連続する2日間（後半）とに分割して行っている。そして、「前半の2日間では、授業での講義や体験、演習を通して、心理支援を現場で行う際に必要となる基本的な知識・技能・姿勢に関する理解、自らの体験について振り返る力、他者と協働する力を養い、今後の実習に向かうための心構えを身につけます。また、後半の2日間では、これまでの体験を振り返り、心理支援の実践者としての自覚と意識を再確認します。」(心理演習シラバス（2025）より抜粋)

このように、心理実習との間に関連性を持たせ、双方の授業内容が有機的に学生の学びにつながるようにスケジュールを組んである。図1に心理演習・心理実習の進め方を示す。

また、これらを遂行すべく実際の授業については以下のように講義テーマを設定している。なお、各講義の

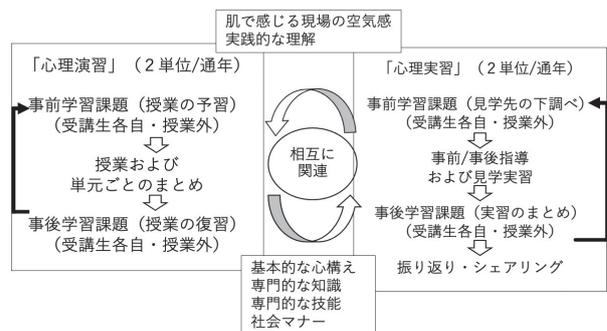


図1 「心理演習」・「心理実習」の進め方

授業時間は第4回、第8回、第16回が各60分、それ以外は各90分で、実施時間合計は1350分となっている。

1. 心理的な支援を行う際の心構え
2. 心理的な支援におけるコミュニケーション
3. コミュニケーションの取り方について
4. 守秘義務・職業倫理と法的な義務についての基礎知識
5. 心理職業務における連携の意味と重要性
6. 多職種連携の実際
7. 施設見学における倫理的な注意点
8. 振り返りとまとめ（前半）
9. 心理的な支援と心理面接・心理検査
10. 心理的な支援における面接技法とは
11. 心理的な支援と日常の支援の違い
12. 地域支援及び地域連携
13. 心理的な支援におけるニーズの把握
14. 心理的な支援における専門性とは
15. 心理的な支援における専門性を身につけるために大切なこと
16. 振り返りとまとめ（後半）

全16回の内、概ね第1回から第8回までが「前半の2日間」、第9回から第16回までが「後半の2日間」に充てられている。

前半2日間の1日目は、いわゆるオリエンテーションとなっている。その年の選考試験に合格した30名がこの日に初めてお互いに顔を合わせる。多くの者が公認心理師資格を取得すべく意気揚々としているが、その分、緊張感や不安も高い。多くの通学制大学でも入学当初みられる風景であるが、通学制大学ではその後数ヶ月をかけて、その緊張感や不安を漸次的に減じていくことができる。しかし、本カリキュラムでは共に学ぶ期間は1年間であり、しかも実際に互いの顔を突き合わせる回数がかかなり限られている。その様な中でお互いが切磋琢磨し学び続けるには、一定程度の相互理解が必要となる。そのため、1日目のオリエンテーションでは1日をかけて、他者をどのように理解し、それを通じて自身について改めて理解し、かつその理解をどのように他者に伝えるか、そしてそのことがいかに難しいことであるかについて、言語的・非言語的な体験を通じて学ぶ機会としている。

2日目は、今後行われる心理実習の事前学習を含んだ内容となっている。心理実習においても各施設見学の前に各々留意すべきことについて指導を行うが、心理演習では「臨床現場ではどういうことが行われているのか」「心理臨床は何をするものなのか」について概略を理解し、今後の心理実習での着眼点を養う機会となっている。具体的には心理面接の実際や各種心理検査がどのように行われているかについて学び、これに関連して心理面接や心理検査で得られた情報の管理（守秘義務および個人情報管理）とそれにまつわる法律や規定について理解する。その一方で、それらを多職種で共有する意義と注意点（多職種連携）についても学ぶ。

心理演習の後半では、それまでの心理実習で学んだことが、いかに心理職の専門性として位置づけられるのかについて学ぶ。後半1日目（全過程3日目）は、各種心理検査の体験学習に充てている。前半2日目でも心理検査については学んでいるが、これはあくまでも概略であって、実際に心理検査の道具に触れ、他者を相手に実施することは、多くの学生にとってこの日が初めてとなる。また、検査者・被検査者という役割をとるので、心理支援の疑似体験（ロールプレイング）もここで初めて行うこととなる。前半2日目や印刷教材などで、心理検査については既に知識としては知っているものの、実際に行ってみると戸惑ったり上手く出来なかったりと様々な体験をする。ましてや、そこから得られたデータを他者理解につなげるには前途遼遠な道のりが残されているが、そのことが他者を理解することの難しさや心理支援の厳しさを学ぶこと、そして「心理臨床は何をするものなのか」にもつながる。具体的には、質問紙法と描画検査、知能検査を体験してもらう（知能検査は一部を抜粋して実施）が、検査結果の解釈についてよりも、実施する際の留意点や教示の仕方、検査道具の扱い方および結果データの管理の仕方についてより詳細に指導している。

後半2日目（全過程4日目）は、主に事例検討（ケースカンファレンス）を行う。この日は、心理演習と心理実習を含めた最終日になるために、カリキュラム全体を通じた総括の意味合いがある。心理臨床実践において、事例（ケース）をいかに扱うかは重要なテーマであって、それは初心者であっても熟達者であっても変わらない。むしろ、初心者の段階から事例に慎重に取り組む姿勢を学ぶことは、資格取得という短期的な目標にとどまらず、「優れた臨床家」になるための必要不可欠な過程ともいえる。その意味でも、最終日に事例検討について扱うことが重要となる。具体的には、「そもそも事例とは何か？」ということについて講義を行い、その上で事例検討を行う。ここで扱う事例は刊行されたものであるが、実際の事例を学生が読んで、各々が感じ取ったことをレポートにまとめるという形をとっている。ここで、実際に臨床現場で行われるいわゆる事例検討のように、互いに疑問点を投げかけたり、考え感じ取ったことを発表し検討する、という形をとらないのは、事例に対して常に敬意を払い慎重に扱う姿勢を学んでほしいという願いからである。本カリキュラムでは1年間という期限の中で、なるべく多くのことを体験し学べるよう内容を吟味・精査しているが、それでも実際の事例を扱うレベルには達することはできない。ここでいたずらに事例を扱ってしまうと、少なからず「もう自分は十分に学んだ」「有資格者と同じレベルである」と早合点してしまう学生も出てくる可能性がある。そのような危険性を回避するためにも、扱った事例に対して一人ずつ対峙し、その時に感じたことや考えたことを慎重に言葉にするという作業（これも「優れた臨床家」になるためには必須なのだが）に、あえて最終日に取り組んでもらうようにしている。

2.1.3 本学における心理演習の特色

既述のように本学の学生は年代や職業を含めて、各自の背景は多種多様である。そのことは、例えば同じ事例を聞いても、それぞれが感じたり考えたりすることが区々であり、また疑問に思うこともより多様となる。結果的に、質疑応答に割く時間が多くなっているが、これは通学制大学の心理系の学部にはない本学の特徴といってよいであろう。

これに関連して、複数の教員が一緒に授業を行っていることも本カリキュラムの大きな特徴と思われる。上述のような多様な質問に対して一人の教員では十分に対応できないこともあるが、心理演習では常に3～4名の教員で授業を行っており、その専門性も異なるため、質疑応答にも十分に対応できる。また複数の教員がいることで、意見の相違も出てくる。例えば事例検討の解釈にも、それぞれの立場や専門性、経験値によってその解釈は異なる。そのことを学生に示すことは、心理臨床の多様性を理解することに繋がり、ひいては「優れた心理臨床家」の育成につながるであろう。無論、質疑応答への対応だけでなく、授業内容やその構成も教員4名で行っているため、学生は心理臨床に関して幅広い視点から取り組むことができるようになっている。

2.2 心理実習

2.2.1 本学における心理実習の定義

心理演習同様、心理実習についても同掲された法律(2024)によって、カリキュラム内容が示されている。その内容を以下に示す。

実習生が、次の(ア)から(ウ)までに掲げる事項について、主要5分野の施設(具体的な施設については、「公認心理師法施行規則第三条第三項の規定に基づき文部科学大臣及び厚生労働大臣が別に定める施設」(2017))において、見学等による実習を行いながら、当該施設の実習指導者又は実習担当教員による指導を受けるべきこと。ただし、当分の間、医療機関での実習を必須とし、医療機関以外の施設における実習については適宜行うこととしても差し支えないこと。

実習担当教員が、実習生の実習状況について把握し、次の(ア)から(ウ)までに掲げる事項について基本的な水準の修得ができるように、実習生及び実習指導者との連絡調整を密に行う。

- (ア) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ
- (イ) 多職種連携及び地域連携
- (ウ) 公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解

「具体的な場면을想定した役割演技(ロールプレイング)」および「事例検討」による知識や技能の修得を目指す心理演習との違いは、「見学等による実習」および「施設の実習指導者又は実習担当教員による指導」等を

通して実際の現場に近い場に身を置く体験から知識や技能の修得を目指す点にあると言えよう。

要心理支援者は何かしら日常生活を送るのに際し困難さを抱えている場合が多く、見学実習を行う際には、心理職を目指すものとしての心構えや配慮が必要となる。本学において心理演習を前半と後半に分けているが、心理支援を行う際に必要となる基本部分について体験的に学ぶ心理演習の前半部分の後に、心理実習の授業を実施するというカリキュラム上の工夫もそのための配慮である。

心理職は要心理支援者のこころを扱う仕事であり、それは「臨床の知」という言葉が示すように、科学的な視点だけでは成り立たず、現場に身を置き考えるという実践者としての視点が必要となる。心理職の実践的な側面は、要心理支援者の内的な世界や心的現実に触れることでもあり、それは日常性とは異なる部分に触れることでもある。そのため、心理職の現場に入るためには、日常の社会的なマナーおよびコミュニケーション等の感覚が必要であると同時に、非日常に触れるような独自の心構えや知識が必要となる。

本学では、これらのことを踏まえながら法律に基づき、シラバスを作成している。以下に本学の心理実習のシラバス(2025)を掲載する。

「心理的な支援を実施している施設にて心理実践を行う際に必要とされる基本的な心理学的知識、技能及び社会的なマナーについて、現場での実習や講演等を通して具体的に理解を深めます。また、現場で必要とされる多職種連携および地域支援等の「チーム」としての協働について、必要な知識および技能を深めるとともに、その現状を理解します。以上の学びを通して、心理援助職に求められる専門性について真摯に考え、答えを探求していくための基本的な姿勢を培います。」

現場では、要心理支援者個人および関係者に対し、面接という場で会うだけではなく、作業グループの中、病院であれば病院生活を送る中でふと出会うなど様々な状況下で会うことになり、それぞれ異なる接し方や対応の仕方が生じることになる。一方、実際の支援においても心理職が個別に要心理支援者に関わることは少なく、他の専門職とのチームで関わるが多く、そのための知識や技能も必要となる。こころに個別性があるように現場にも個別性があり、主要5分野ごとにもそれぞれ異なる部分が多い。心理職は各現場における個別性を見立てながら、多層的に業務を日々行っているのが現実の姿である。

しかし一般的に学生にとって心理職と実際に接する機会は少なく、前述した個別性や多様性を含めながら心理職をイメージすることは難しい。必然的に学生の抱くイメージも単純な個別面接の場面であったり、比較的身近な医療場面や教育場面にて勤務する印象を漠然と持っている場合が多い。この傾向は一般的な通学制の大学ではより顕著であると思われるが、本学のような年齢が高く、社会人経験を有する学生が多い場合、実際に臨床現場および臨床に近接する現場での勤務経

験を持つ学生、対人職（教員等）に従事している学生も多く存在するため、自身の業務経験の延長線上で考える傾向が強い。このため、逆に自身のこの傾向に気づかせ、いかに心理的な視点を有してもらえかがカリキュラム上の重要なポイントとなる。

2.2.2 授業の内容

実際の授業については以下の通り可能な限り幅広い分野の実際を学べるよう講義テーマを設定している。本学は社会人の学生が多いことや居住地も全国に分散していることから、通学制のような毎週定時に授業を実施することは行っていない。授業は5月から12月の主に金曜、土曜、日曜という週末に1～3日間のまとまった授業を数回に分け実施している。中でも保健医療分野の授業は病院見学実習が必須であり、かつ病院では1回の見学人数が5名程度と制限されている場合が多い。このことから本学では学生を3組（10名）に分け、それぞれに対し見学実習を含む3日間の授業を実施している。

時間数は全16回、総計90時間の設定で実施している。法律上は80時間以上であるが、本学の面接授業の枠組みが90時間となっており、その設定で現在のところ組まれている。以下に授業内容を示す。

1. 「心理実習」開始ガイダンス（病院見学実習の事前指導を含む）
2. 保健医療分野における心理職の業務と実際について①（講義・事前指導）
3. 保健医療分野における心理職の業務と実際について②（見学実習・事後指導）
4. 保健医療分野における心理職の業務と実際について③（講義・振り返り）
5. 司法・犯罪分野における心理職の業務と実際について①（事前指導）
6. 司法・犯罪分野における心理職の業務と実際について②（見学実習・事後指導・振り返り）
7. 産業・労働分野における心理職の業務と実際について（現場講師による講演・講義）
8. 「心理実習」中間指導
9. 心理専門職の諸側面について（講義）
10. 教育分野における心理職の業務と実際について①（現場講師による講演・講義）
11. 教育分野における心理職の業務と実際について②（講義・振り返り）
12. 福祉分野における心理職の業務と実際について①（事前指導・見学実習・事後指導）
13. 福祉分野における心理職の業務と実際について②（現場講師による講演・講義）
14. 現地見学実習（6か所から1か所選択）（見学実習・事後指導）
15. 心理職の多様性と広がり（講義）
16. 「心理実習」の総評および評価

なお、「1.「心理実習」事前ガイダンス」に先んじて

「心理実習開始ガイダンス」を行い、カリキュラム全体の概要について説明を行っている。心理実習は見学実習を含むこともあり、カリキュラムが複雑であり、最初に説明する機会を設ける方が見通しを持ちやすく授業に入りやすい。また、「心理実習の栞」という冊子を作成し、授業の進め方、見学実習の意義や留意点等について確認を行い、振り返りやすくする工夫も行っている。

見学実習という体験は、学生にとっては未知の体験であり、「当日の服装をどうしたらいいか」といったことから「利用者に話しかけられた場合にどうしたらいいか」といったことまで、様々な不安を想起しやすい。「心理実習の栞」はその不安を軽減し、見学への前向きな心構えを作る際に役立つものでもある。

また、カリキュラムの中間点あたりに、「8.「心理実習」中間指導」という授業を取り入れている。本学の学生は通学制と異なり、学生の背景が多様であり、毎年異なる傾向を持つ学生が集まる。そのため、学生の授業に対する姿勢や感じていること、将来のキャリアイメージや進路について確認するためにアンケートを実施し、その結果に基づき短い時間であるが個別面接を行っている。その際、授業で感じていることについて不安等を含めて話を聴くと同時に、本学には大学院でのカリキュラムを実施していないこともあり、大学院進学を希望する学生に対して簡単なアドバイス等を行う機会としている。

現状、公認心理師法よれば、「当分の間、医療機関での実習を必須とし、医療機関以外の施設における実習については適宜行うこととしても差し支えないこと」とはされているが、できる限り多様な現場を肌で感じ、知っておくことが学びにおいては重要となる。そこで本学では見学実習を「全員参加の見学実習」（現在、保健医療分野、司法犯罪分野、福祉分野の3施設において実施）と学生の興味関心に応じて実習先を選択できる「選択見学実習」（「14. 現地見学実習」）という2種類の見学実習を実施している。これは前述した公認心理師の多様性に対応したものであると同時に「生涯教育」にも通じるところがある。学生は自分の興味関心の中で自分の見学したい施設を選択することが可能となる。また、本学の特徴である社会人学生の多さ、学生の居住地が全国に分散していることに対応したものである。「選択見学実習」は9月から11月の間、実習先も他分野にわたり、関東圏に限定されない形で選ぶことが可能であり、学生の職業を含めた生活状況やスケジュールを考えながらの参加が可能となっている。表1に年度ごとの選択見学実習施設数の推移を示す。

2.2.3 本学における心理実習の特徴

公認心理師の資格は汎用性が高く、従事する現場は主要5分野という言葉からわかるように多様であり、現場それぞれに異なる現状や現実が存在し、求められる知識や技能も一様ではない。また、繰り返し述べていることではあるが、本学の授業を受ける学生の特徴として、専門、職種、年齢、性別、居住地も異なる点

表1 選択現地見学実習の推移

年度	保健医療分野	教育分野	福祉分野	司法犯罪分野	産業労働分野
2022年度	1	2	1	—	—
2023年度	2	2 (1)	1	—	—
2024年度	2 (1)	2 (1)	1	—	1
2025年度	3 (2)	2 (1)	1	—	1

※ 基本的に学生1人につき1か所選択可能

※ () 内の数字は関東圏以外の見学実習施設数

※ 2025年度は年度途中で1か所追加された(計7か所)

があげられる。これらの特徴は通学制の大学とは大きく異なる面であり、心理演習同様、カリキュラム設定においては、この多様性が学びに生きるよう工夫している。

心理実習の授業では、グループ学習（ディスカッションおよびシェアリング）の機会を多く設定している。学生にとって、前述したような異なる背景を持つ他学生との話し合いの機会は、自分と異なる考え方や異なる現実を生きる他者との出会いの場となっており、臨床において重要となる「個別性」を体験的に学ぶ場となっている。自分と異なる考え方に出会い、自分と考えが異なる他者に受容される体験は臨床や日常に生きる体験であり、専門教育および生涯教育という点においても重要な学びとなっている。

前述した「選択見学実習」もこの多様性、個別性を知る機会として重要である。学生の選択の仕方によっては、異なる病院、異なる機能を持つ病院、異なる地域にある病院等、同じ分野の異なる施設に見学を希望することが可能である。施設の個別性や多様性についても実際に現地で体験しないことには気づけない部分が多い。この見学施設自体の個別性や多様性を体験できるのは本学の特徴であるとともに、社会人という一定の職場を既に知っている学生が多いゆえに理解できることではないかと考えている。

また、見学実習時に出会う実習指導者や授業で講義を担当する心理職の先達者の存在も、心理実習での学びにおいて影響が大きいと実感している。「実習」の「習う」という言葉には、学んだ知識や技術を身に付けるために繰り返し学ぶという意味があるが、一方で「做う」ということも心理実習では重要となる。心理職の従事する現場は、汎用性の資格でもあることから多様であると同時に、心理職自身の現場での在り様も多様となる。これから心理職を目指す学生にとって現場で目にする実習指導者の歩き方、クライアントの接し方、他の専門職とのかかわり方を含めた立ち振る舞いは、自分自身の将来の姿を思い描くとともに、「做う」べき一つのモデルとして意識される。それは講義担当者として出会う心理職の先達の方々の話し方、考え方、質問に対する答え、学生に対する向き合う姿勢に対しても同じことが言える。

そのため「心理実習」では、現場だけでなく、心理職のキャリアや立ち振る舞いも重要な学びの要素として考え、できるだけ多くの現場で、多くの心理職の話

を聞き、接する機会を提供できるよう考えている。

3. 受講した学生へのアンケート

3.1 アンケートの実施方法

2.2.2でも言及したが、心理実習中間指導時に「心理演習・心理実習受講者への進路に関するアンケート」を実施し、その年度に在籍する学生の現状や進路、そして授業に対する姿勢や感じていることについて把握することを試みている。アンケートはメールで事前に各学生に送付し、中間指導の授業当日に記入したものを印刷し、持参してもらう形をとっている。

結果は中間指導の内容とともに、その後の授業内容の見直しや修正に活かすとともに、本学の心理演習・心理実習を受講する学生の特徴等を把握し、本カリキュラムの位置づけや意味等を考えるための参考としている。以下にアンケートの結果を抜粋して示す。

なお、アンケートは毎年実施しているが、心理演習・心理実習の授業内容は開講当初、試行錯誤の段階にあり、年度ごとに構成や到達目標に変更が生じていた。2024年度および2025年度には、授業構成および実施方法が一定程度安定したため、本稿では分析の一貫性と解釈の妥当性を確保する観点から、この2年間の実施分を対象とした。

3.2 アンケート結果

3.2.1 受講生の職業について

表2には心理演習・心理実習受講生の職業についてのアンケート結果を示す。

受講生の職業の約半数が臨床とは関わりのない職業となっている。また、分野についても主要5分野に属さない者が約3分の1存在するなど、多様であることがわかる。

表2 本学の「心理演習」「心理実習」受講生の職業

	職種				分野（仕事をしていないものは除く）					
	臨床に従事	臨床に接	それ以外	無職	保健医療分野	教育分野	福祉分野	司法犯罪分野	産業労働分野	その他
2024年度	5	6	14	5	2	6	4	1	0	13
2025年度	5	5	16	4	5	4	4	0	1	12

3.2.2 資格取得に関する進路について

表3に希望する資格および他大学の受験時期についてのアンケート結果を示す。

公認心理師の資格取得を目指しているものが多いが、半数強は臨床心理士の取得も念頭に置いていることが

表3 「心理演習」「心理実習」受講生の資格取得に関する進路

	取得を希望している資格		他大学院受験を考えている				Bルートを検討中
	臨床心理士	公認心理師	今年	来年	再来年	それ以降	
2024年度	19	29	9	11	9	6	—
2025年度	21	27	7	10	5	5	3

わかる。大学院への受験時期について、多くが本授業の履修中もしくは終了した次年度を考えているが、再来年以降と長期のスパンで考えている受講生も一定数存在する。受講生の多くが有職者であり、中には家族がいる者もあり、自身のキャリアや生活を考慮しながら考える必要があるためと推測される。

3.2.3 心理実習・心理演習の授業に関しての感想や感じたことについて

表4（文末に掲載）には、アンケートにて「心理演習・心理実習の授業について、思うところを書いてください」という自由記述形式で受講生に答えてもらったものをまとめた。なお、本稿に掲載したアンケートの自由記述回答は、紙面の都合上、回答の主旨を損なわない範囲で表現を簡潔にする編集を行っている。また、個人が特定されるおそれのある記述については、匿名性を確保するため表現を一部修正している。いずれの場合も、回答内容の意味や評価の方向性が変化しないように配慮しており、分析結果に影響を及ぼす加工は行っていない。

まず、全体を通して受講生の満足度の高さが読み取れる。「これまで学んできた知識が体感として感じる事が出来た」等座学で学習した内容が本授業に繋がっていることを実感する感想も見られ、本学の学部段階における公認心理師カリキュラムの各学科と連動していることが読み取れる。

中には、広域通信制である本学ならではの内容も見られた。「社会人になって学ぶ場が確保できていない部分もあるため、非常に貴重な場」「人生の紆余曲折の結果として心理臨床に関心を持ったため、そのような者に門戸を開いている放送大学の懐の大きさに感謝」「家庭や仕事の都合など、授業を受ける上での困難さは多々あるが、それでもここに来ることができ沢山の経験。心から感謝」等の内容は、教養教育および生涯教育を含む本学の意義が読み取れる部分だと言えよう。

同期の存在に関する記述、グループ・ディスカッションおよびシェアリングに関する記述が多いことも一つの特徴である。「通信制の大学では、なかなか学習共同体を作るのは難しいだろうと思っていたが、それが実現され、きっと今後も繋がっていける仲間ができたことをとても嬉しく感じる」「今までずっと独学で「心理学」というものを勉強してきたので、在職の心理師の方々と同じく「心理学」を学んでいる学生と交流し、話ができただけはとて得がたい経験」という内容からは、本学の受講生の他者との関わりを希求する気持ちの強さが感じられた。これらは、「クラスメートとともに授業を受けることにとても刺激を受けている。様々なバックグラウンドを持っている方たちとディスカッションをすることで色々な視点に気づくことが出来るのが面白い」という内容に端的に見られるように本授業において大きな意味を持つ一方、「他の受講生の考えや視点、バックグラウンドや進路の話を毎回聞くたびに大きな刺激を受けている。時に、それが大きすぎて重さを感じたりする」という感想にも見られるように、

戸惑いや負担感を感じる学生も存在する。しかし授業を重ねる中、「こうした体験がすべて大学における学びだと考えている」「普段の仲間とのコミュニケーションの仕方やタスクへのアプローチ等が異なり、より大きな多様性を経験。心理専門職が対象とするクライアントという視点からとらえると、これも大きな意味があると考え、自分の人としての幅を広げるためにも多くの方々に関わるようにしていきたい」という風の一つの学ぶ材料として吸収していく過程が感じられる。

見学実習に対する記述も多くみられた。「実際に心理職の方々が勤務している職場を見て、聞いて、肌で感じる事が出来て大変貴重な経験が出来ている」「現場ならではの「場」の空気のようなものもあり、言葉にならないところもあるが、肌で感じるものもあった」「現場で働く心理職の方の生の声やその場の雰囲気は、座学よりも大きな学びがあり、「すっ」と深く頭と心に染みわたった」等受講生にとっては大きな学びの機会となっている。また、「実習先の領域が5領域すべて網羅されている過程を持つ大学はなかなかないと思うので、これ以上ない環境」等本学の授業の充実度について言及するものも見られた。

本授業を通して、自分自身に気づく、自分自身の一面に出会った学生も多い。「こころの専門家としての視点を強く意識する内容だと感じた。自分のこころの動きを「ものさし」として用い、「わからないこと」や「違和感」などを手がかりとして使うなど通常とは違い、こころの使い方の訓練なのか」「自分と他人の心に触れることの難しさも感じる」「今までの自分の価値観が覆ったり、無意識の偏見に気づいたりして、自分自身を振り返る機会が多く、自分には心理職としての資質があるのか迷う部分も」「心理の現場を知りたいと意義込んで参加した心理実習だが、いつの間にか視点が外界ではなく内界に移り変わっていることに毎度驚かされる」等の気づきは心理職としても、日常生活において生きること自体にも繋がるものであり、本学におけるこの授業の目的である「自分自身とは」「心理臨床とは」という問いに繋がっている。しかしこの問いは明確な答えがあるものではないため、「心理職の現場や心理職がどのように心と向き合っているのか、その根幹となるところに以前よりも近づいているはずなのに、逆に今までよりも遠くを感じる事もある」「最初の授業で、「自分について知ること」がこの授業の趣旨だと話されていたが、自分と向き合うことがやっぱり私にとっては一番難しいようで、いまだにうまくできていないのかかわからない」等の難しさや戸惑いを示す内容も見られた。

また、「大学院入試が始まったが、周囲の若い通学生と試験会場にいと、『この人たちはもしかするともっと厳しい演習実習を経験しているかもしれない。勝てるのだろうか?』と不安に」というように通学制の大学に通う学生との比較や年齢的な部分からくる不安等も読み取れ、これらは本学ゆえの不安であると言えよう。

4. 結果と考察

本学の心理演習・心理実習は、公認心理師制度に準拠した標準化カリキュラムとして設計されている。しかし、実際の授業場面では、資格取得に必要な知識・技能の獲得だけでは捉えきれない学びが生じる。たとえば、仕事や家庭との両立に悩みながら参加する学生の語りからは、「学ぶこと」そのものが生活の再編や自己理解と結びついて経験されている様子がうかがえる。また、働きながら通う負担や生活上の調整を引き受けつつ参加する学生が多く、学びはしばしば「自分自身と向き合うこと」や「今後の生き方を捉えなおすこと」と結びついて語られる。以下、授業後アンケートの分析を踏まえ、本学における心理演習・心理実習の教育実践モデルを検討する。

4.1 教養教育と職業能力形成教育の境界領域としての心理演習・心理実習

本学における心理演習・心理実習は、公認心理師養成課程に位置づけられた中核科目であると同時に、本学の理念である「生涯教育」「教養教育」の延長線上に位置づく教育目標がある。これは単に公認心理師資格取得をめざした教育にとどまらず、学生が「自分自身と向き合い、深く考える」行為を通して、心理臨床家の道を歩む際に求められる「悩みつつも主体的に考える覚悟」の醸成を促していくことを目指しているからである。このことは心理臨床家としての在り方を問うことを通して、教養教育的側面に含まれる省察を併せもつ点に特徴があると考えられる。つまり、心理演習・心理実習は「優れた心理臨床家になるための授業」という位置づけと同時に、知識・技能の伝達を超えた、人格的成熟を伴う省察的教育として心理職養成を捉える立場を明確にしている。

波田野（2023）によれば公認心理師制度のもとで学部段階から実習教育が行われるようになり、「知識の理解」から「他者へのかかわりを通して自己を自覚する」学びへと拡張された。教養教育を理念として掲げる本学では、学生が「知識を得る学習者から実践家への転換を体験する」教育過程そのものを教育的意図としていくことで、教養教育と職業能力形成教育（資格取得）が重なり合う接点、いうなれば、互いの論理を架橋し合う境界領域に成立する独自の教育実践と捉えることができる。

そのような観点は「多様な背景をもつ学生が共に学ぶこと」自体を教育資源として積極的に位置づける点に本学の特徴がある。学生は10代から60代までの幅広い年代層にわたり、学歴・職種・社会経験が異なる。背景が異なる多様性を有するがゆえに、授業内で同じ概念や技法を扱っても、理解や受け取り方は様々であり差が生じてくる。

しかし、授業におけるこの「ばらつき」を学習者の課題としてではなく、むしろ「多様な考え方や価値観に触れる学びの機会」と捉え、学生間のコミュニケー

ションを最大限に活かす教授法を重んじている。この観点は「職業能力形成教育（資格教育）における教養的成熟」を具体化する実践として位置づく。とりわけ「仲間との学び・支え」に関する語りが目立ち、通信制学習の孤立感が、対面での協働体験によって相対化されている点が示唆された。

学生は授業や学生同士の対話を通して他者との違いに気づき、自己の枠を超えて考えていくことを学ぶ機会となる。例えば、表5に示したように、「千葉県に来るのは大変だが苦ではない」「孤独な学習の中で仲間ができた」といった語りが多く見られ、学習の意味づけは資格取得という制度的動機よりも生活実感や対人関係に根差したものとして語られていた。とりわけ「仲間との学び・支え」に関する記述が目立ち、通信制学習における孤立感が、対面での協働体験によって相対化されている様子がうかがえた。さらに心理支援に不可欠な「他者理解」と「個別性の尊重」を体験的に学ぶプロセスでもある。心理実習においてもグループディスカッションやシェアリングを重視しているが、異なる背景の学生が相互に考えを交流する体験は、臨床的態度の基礎の形成にもなる。このような学習者間の異質性を前提とした協働的学習は「関係の学び」を軸に据えるものであり、心理臨床教育上の意義があると考えられる。

4.2 省察的实践と熟達過程を支える二重循環構造

心理演習を担当する教員らにとっては、心理演習と心理実習をどのように接続し、意味づけをしていくかという点は、授業設計を行う上で常に検討が必要となる課題であった。資格取得は終点ではなく出発点に過ぎないとする立場は、授業設計や運営において可視化されている。

心理演習では、「ロールプレイと事例検討」を通じて基本的水準の知識と技能を修得し、臨床現場の実際を理解することが目的である（公認心理師法、2017）。本学の心理演習は4日間が充てられ全16回（計1,350分）であり、4月に実施する前半2日間と翌年1月に実施する後半2日間から構成される。その到達目標としては、「知識・技能・姿勢の理解」「体験の振り返り」「協働力の涵養」「心理支援者としての自覚」を掲げ、前半2日間にて「学びの土台づくり（模擬体験・講義・演習）」、後半2日間では「振り返りと自覚の深化」の二段階構成となっている。心理演習を心理実習の事前・事後学習に位置づけることで、知識と経験を往還させる学習構造となる。前半では心理支援に必要な知識・技能・姿勢を講義と演習を通して学び、体験の振り返りを行う。後半では見学実習経験を踏まえつつ、心理支援者としての自覚について再確認をする。このように演習には「講義→演習→振り返り」を1ユニットとする省察的サイクルが内包されている。

一方、心理実習は約90時間の見学実習であり、医療分野を必須としつつ、司法・産業・教育・福祉の各分野を横断的に体験できる構成であり、チームアプローチ・多職種連携・倫理を中心に展開する。授業は「事

表5 心理演習・心理実習を通じた学びの深化

分類カテゴリ	コメント
学びと仕事の両立	ほぼ毎月、千葉県に来るのは色々な面で大変だけど内容が充実しているので苦ではない。
	家庭や仕事の都合など、授業を受ける上での困難さは多々ありましたが、それでもここに来ることができて沢山の経験をさせてもらったことに心から感謝しています。
	社会人になって学ぶ場が確保できていない部分もあるため、非常に貴重な場となっている。
	働きながら学ぶ身として、放送大学がこのような門戸を開いてくださっていることに心から感謝申し上げます。
実践的学びの機会	時間を確保していただいている上に、授業中に完結するように配慮をいただいていることがありがたいです。
	心理実習は、見学の視点や心構えについて手厚く事前指導していただくことで、それを手がかりに見学実習により能動的に臨んでいるように実感しています。
	学部段階で、医療領域以外の見学実習に行く機会をいただけることは珍しいことだと思う。
	実習先の領域が5領域すべて網羅されている過程を持つ大学はなかなかないと思う。
仲間との学び・支え	現地実習はあつという間にすぎていき、正直ついていっていただいいていっていいいっばい。
	様々なバックグラウンドを持つ参加者の方々から得られる学びも大きかった。
	共に学ぶ受講生の方も、様々なバックグラウンドや年齢の方がいて、授業の合間の些細な雑談においても刺激を受ける。
	志を同じくする受講者の方々と一緒に一年を通して頻りに会い、同じ実習・演習に参加し、話をし、互いの思いや展望を聞き合うことから得るものが多くあり、大変ありがたい機会になっている。
自己省察と成長	通信制大学は自分のペースで学習できる反面孤独な戦いでもありましたが、ここに来て同じ目標に向かう仲間が出来たことはとても価値がある財産だと思います。
	毎日のレポート作成は、簡単なものではないけれども自分自身と向き合う機会でもある。
	心理演習・心理実習で自分と向き合う時間をいただくことが、日々の臨床への姿勢を振り返る場にもなっている。
	改めて支援の基礎を学びなおすことで、日々の業務の中で行ってきた自分の対応を振り返るきっかけとなった。
	心理演習心理実習は単なる座学とは異なり、自分自身と向き合う時間になっているように思います。

前指導→見学→事後指導」の三段階で運用され、さらに中間指導・面談を加味し、経験を言語化していくことで意味付けをし、次の実習に向けた準備を促す。

これらの二科目は相互に連動しており、心理演習での模擬的学び（シミュレーション）と心理実習での現場体験、さらに受講者自身の職務経験を往還し拡張される循環が形成されている（図2）。つまり、心理演習の「言語化→共有→再省察」の流れは、心理実習における「事前指導→見学→事後指導」構造と連動しており、演習と実習が二重の省察循環を形成している。また、心理実習での「做う（ロールモデル観察）」体験は、心理演習内で重視する「他者との触れ合い」や「協働の学び」と連動している。したがって、この循環の中で、知識・技能の習得は態度変容や倫理的感受性の育成へと展開し、学習が単なる資格取得を目的とした教育を超えた省察的实践へと昇華する構造に至っている。

これは Kolb (1984) の経験学習モデルにおける「体験→省察→概念化→実践」の循環構造に対応しているが、本学の心理臨床教育の文脈では、省察の過程に情

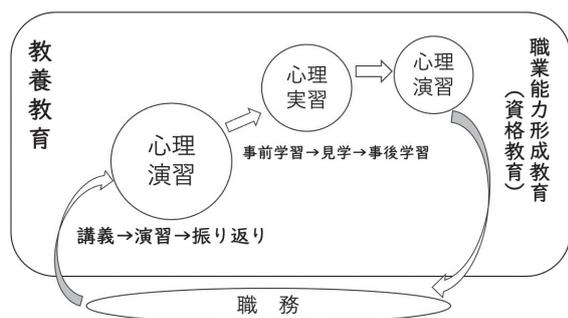


図2 「演習→実習→職務」の拡張的経験学習サイクル

緒的揺らぎや対人関係上の葛藤がより強く前景化する点に特徴がある。Kolb (1984) は自身の直接経験を学習資源とし、その経験を省察することの重要性を指摘し、公式な教育によって補うことで職場において、仕事やキャリア発達の機会を通じて個人の発達を促進させる環境と位置づけている。もっとも、Kolb のモデルは企業研修を主な射程としており、そのまま心理臨床教育に適用することには違和感がある。実際に学生の語りには「省察」というよりも自己理解に対する「戸惑い」や「混乱」が強く印象づけられている。

社会人学生はこれまでの職業体験や生活史に根ざした学習動機をもち、それが学習を支えている。心理演習・心理実習での学習体験には学生の「働く自己」と「学ぶ自己」の往還があり、職場をもつ成人に対する臨床教育的実践知の場として機能している。心理演習は学生にとって「体験→省察→概念化→実践」循環の初期部分を担い、心理実習および職務での応用へと発展する重層的構造がある。中原 (2013) は、経験学習 (Experiential learning) を人材開発や育成の中心的概念として説明している。心理演習・心理実習にはそのような経験学習モデルに即する要素が含まれている。

しかしながら、本学においては成人学生のもつ生活経験・職務経験を「臨床的素材」として再解釈させる経験学習と捉え、知識習得型の教育を超えて「生き方の再構成」を支える学びとして展開されて、心理支援における専門的態度の初期形成を支えていると考える。そして、「体験と省察の往還」は、ドレイファス・ドレイファス (1987) が示した熟達過程の初期段階となる規範依存から状況的判断への移行を支えていく契機となる。このように、心理演習と心理実習は、知識や技能

の伝達を越え、振り返りを丁寧に行うことを教育の展開に組み込んだ実践であり、通信制大学における心理臨床教育の可能性を示している。もっとも、この教育効果を実証的に示すデータは現時点では十分とは言えず、今後の検討課題として残されている。以上から、本学の方式は、社会人を主対象とする通信制大学において、標準化された資格教育の枠内で省察を教育実践の基盤とすることで成人学習者の実存的な問いに応答していく成人臨床教育モデルとして整理することができる。

4.3 まとめと今後の課題：放送大学方式の意義

本学の心理演習・心理実習は、全国的に標準化された到達目標と内容を有しながらも、本学では通信制・社会人中心という条件下でその柔軟な運用が工夫されている。本学の心理演習・心理実習の「定員 30 名・4 名教員の合同授業・中間指導・事後指導」という運営体制は、個別支援を重視した質保証の仕組みである。心理実習における「選択見学実習」や「複数教員による授業運営」は、学習者の興味関心や勤務状況に応じた柔軟な調整を可能にし、多様性を尊重し各自の学びの深化に向けた工夫であり、「放送大学方式」ともいえる特徴を示している。心理演習にて「他者と触れ合う機会を多く持つこと」は、単なる教育技法ではなく、通信制教育における孤立を防ぎ、学習共同体の生成を支える理念的要素である。これは標準化した養成教育の中に「個の学び」を回復する視点であり、成人学習における相互省察型教育の可能性を拓いている。

本稿で検討したように、本学の心理演習・心理実習は、制度的な資格教育でありながら、成人学習者の多様な経験を生かし、省察的实践を通して熟達の初期段階を支える教養型臨床教育として機能している。心理演習の枠組みは、知識・技能・態度の習得を目的としながらも、「他者と共に学ぶ」「振り返りを重ねる」「実践者としての自覚を育てる」という三層の目標を持ち、心理実習と有機的に連動する。学生は演習での模擬的体験を通して基礎的理解と協働の姿勢を培い、実習で現場のリアリティに触れ、省察を深め、職務や生活の中でそれを再実践していく。この「演習→実習→職務」の拡張的経験学習サイクルが、本学における公認心理師教育の独自性を形成している。

本学の方式は成人臨床教育モデルとして一定の意義をもつが、その効果を実証的に示すデータはまだ十分ではない。少なくとも現段階では、教育実践の仮説モデルとして位置づけることが妥当と考える。今後は、受講者の質的データ（自由記述や振り返りシートなど）を分析し、省察の発達段階（自己理解・倫理意識・関係性・連携志向）の可視化を図ることが、実践研究における重要な課題となる。心理臨床家の熟達化については Rønnestad & Skovholt (2003) の心理臨床家熟達化モデルが示唆に富む。これらの先行研究を参照しつつ、本学の心理演習・心理実習という具体的な教育実践の中で蓄積されてきた学生の語りや振り返り記述を手がかりに、初学者の学びの位置づけを整理し、演習から

実習へと連続する省察の深化と学びの転移過程についてどのように理論化できるのかを検討していくことが、今後の実践研究上の課題となる。これらの検討を通して、「放送大学方式」による成人臨床教育モデルの理論的枠組みをより精緻化していくことが求められる。

参考文献

厚生労働省社会援護局障害保健福祉部 精神・障害保健課公認心理師制度推進室 (2024)

「公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公認心理師となるために必要な科目の確認について」
<https://www.mhlw.go.jp/content/000712061.pdf>

(2025年11月12日閲覧可)

公認心理師教育推進室 (2025) 「心理演習シラバス」, 「心理実習シラバス」

https://www.ouj.ac.jp/reasons-to-choose-us/qualification/psychologist3/02/assets/pdf/kounin_syllabus_2025.pdf

(2026年1月27日閲覧可)

ドレイファス, H.L.・ドレイファス, S.E. (著) 椋田直子 (訳) (1987) 『純粹人工知能批判——コンピュータは思考を獲得できるか』 アスキー出版局。

(原著 *Mind over Machine: The Power of Human Intuition and Expertise in the Era of the Computer*, 1986)

中原淳 (2013) 経験学習の理論的系譜と研究動向. 日本労働研究雑誌, 55(10): 4-14

波田野茂幸 (2023) 放送大学における心理演習・心理実習の授業づくりの観点に向けた探索的検討. 放送大学研究年報, 41, 105-117.

文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課, 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部 (2017)

「公認心理師法施行規則第5条第26号の規定に基づき文部科学大臣及び厚生労働大臣が認める施設及び同施行規則附則第6条第2号の規定に基づき文部科学大臣及び厚生労働大臣が認める施設並びに公認心理師法施行規則第三条第三項の規定に基づき文部科学大臣及び厚生労働大臣が別に定める施設第24号の規定に基づき文部科学大臣及び厚生労働大臣が認める施設について」
<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000964031.pdf> (2025年11月12日閲覧可)

Kolb, D.A. (1984). *Experiential Learning*, New Jersey: Prentice Hall, Inc.

Rønnestad, M.H. & Skovholt, T.M. (2003). The journey of the counselor and therapist: Research findings and perspectives on professional development. *Journal of Career Development*, 30, 5-44.

表4 心理実習中間指導時に「心理演習・心理実習受講者への進路に関するアンケート」における「心理演習・心理実習の授業について、思うところ」について

項目	2024年度(3期)	2025年度(4期)
「心理演習」 「心理実習」 の授業全体 ・感じた こと	<p>[基礎的知識との関連]</p> <p>・教科書で学んだことが現場でどのように生かされるのか知ることができ、貴重な機会だと実感/これまで学んできた知識が体感として感じる事が出来た/教科書の上でなぞっていた職名が立体的に実体を持ち、ようやく自分の中でその名前と実体が結びついた/教科書で学ぶのとはまた全然違う刺激が毎回あり、この授業を受けることで自分の世界が広がった</p> <p>[心理職(教員を含む)の講義・話との関連]</p> <p>・大学内の講義についても先生方の言葉に気付きをもらうことが多く、授業を受けることが出来てよかった/臨床での長い経験を持つ先生方の話を直に聞けることは、施設見学と同じく大変貴重な機会/経験豊富な、それも諸領域の先生方に話を聞いたことと、自分になじみのなかった領域の施設を見学できたことはとても得難い経験/実際の心理職に携わる先生方の生の声を聴ける貴重な時間/先生方が受講生に向けて心理職の革新となると何を何とか伝えようとする熱意に心揺さぶられたと共に、心理職に携わることのやりがいや魅力を感じた/多くの臨床経験のある先生方と実際に対面で接することが出来て、その話や身にまよっているオーラにあこがれを感じた/授業で先生の講義を聴いて、新しい知識や考え方をインプットして、学生同士の話し合いで自分の考えや感じたことをアウトプットする時間はとても充実/先生方に講義をいただき、一言も逃したくない思いでメモを頑張っていると。先生方(実習先の先生方も含めて)のお話はずっと入ってきて心に響く</p> <p>[学びについて]</p> <p>・「心理演習」「心理実習」では、各分野の現場で求められる心理職の役割、責任、チームでの協働体制など実感を持って学ぶことが出来る/心理専門職の業務分野は幅広く多岐にわたっており、様々な分野で心理専門職が必要とされていることを実感</p> <p>[楽しみ・面白さ・充実感等]</p> <p>・自分がどんなことに学びを得、興味を感じ、考えるのか、楽しみ/授業に出席することの負担も多々あるが、それでも毎月の授業が楽しみ/心理臨床の多様な領域を見学できる「心理演習」「心理実習」に満足/すべての過程がカウンセリングを受けているよう</p> <p>[その他感想]</p> <p>・ここへ来ると先生方の温かさを感じる。日常生活では感じる事ができないもの。肌で感じるとはこういうものなのか/実際に自分が体験することの大切さをとても強く感じる</p> <p>[放送大学の特徴に関連]</p> <p>・これは放送授業とは異なる対面の力だと思う/最初は大量にレポートが出たら、仕事の両立ができるだろうかと考えていたが、その回その回で日誌等を書いて提出する形式なので仕事日に持ち越すことなくできている/公認心理師資格が前提とする高校生時点で心理学部への入学を決意する選択肢は100%想像できず、人生の紆余曲折の結果として心理臨床に関心を持ったため、そのような者に門戸を開いている放送大学の懐の大きさに感謝/実習先でその場所の雰囲気を感じたり講義で先生方が語られる言葉を聴いたり、グループワークを通して他の受講生の方と接したりと激しく動いている訳ではないのに、身体全体を集中させているような感覚だったので、授業後は疲れを感じる事が多かった/私は社会人という立場なので、月々1・2度の実習は、なんとかやっつけていけるありがたいスケジュール</p>	<p>[基礎的知識との関連]</p> <p>・4人の先生方それぞれの経験を踏まえた話を伺う、指導を受けたりし、これまでの家でのテキストを使用した学習が、実践のイメージと結びついていくように感じる</p> <p>[心理職(教員を含む)の講義・話との関連]</p> <p>・講師の方々には、私達受講生がより良い環境で学べるよう常に尽力。その話も興味深く大変感謝/講義では、先生方より臨床体験に基づいた様々な話が聞け、周辺の興味深い事柄も伺うことができ、大変好奇心が満たされる</p> <p>[学びについて]</p> <p>・本演習・実習は、自分で感じる事、考える事、思いを巡らすことができる貴重な時間であると思う/はっとする言葉で、特に序盤は細々と技術的なことを詰め込まれるより、心理職としての心構えや根本となる姿勢についてじっくり教えられた。通学生のように1,2年生の頃から見たことある、というわけでない30人の学生に、1年の間に何とか最低限必要なことを学ばせようと教えてくれているのを感じる/大変充実した内容の授業を受けることができる喜びを噛みしめつつ、先生方から教わった心理に携わる上での姿勢や視点について、余すことなく吸収したいという思い/一つ一つの講義、言葉を通して心に触れるということはどういうことなのか、自分なりに考えていきたいと思う</p> <p>[楽しみ・面白さ・充実感等]</p> <p>・はじめは不安だったけど、今は楽しめている/難しい授業だが、その過程自身が心理職として日々向き合う姿勢を体験しているようで面白い/実際に現場を知り、自分なりに考える機会があり、新しい世界を開けていることにとってもわくわく/充実していても勉強に/率直な感想として、これほど興味深く、楽しい授業だと思っていなかった/授業を受けるたびに、知らないことを知るたびに、自分の考えの幅も広がっているようで、すごく面白い/受講の機会をいただいたことに、深く感謝。このような充実した学びの機会を得られるとは想像をはるかに超えていた</p> <p>[その他感想]</p> <p>・昨年に合格通知を受け取り、スケジュールを確認した際は長い1年(年度)になりそうだと思っていたが、実際に日常を過ごしながら授業を受けていると時が経つのは早いと感じるように/担当の先生方や他の受講者の皆様の全ての面においてのレベル感・質感の高さを痛感し、圧倒されつつも深く敬意を抱き、良い緊張感を持ちながら受講/授業で学んだことを実践にも活かして行きたい/充実した内容の授業を受けることができる喜びを噛みしめつつ、先生方から教わる心理に携わる上での姿勢や視点について、余すことなく吸収したい</p> <p>[放送大学の特徴に関連]</p> <p>・授業中に完結するように配慮されていることがありがたい/学生に負担がかかりすぎないように配慮いただき、本当にホッと安心して受講/ほぼ毎月、千葉県に来るのは色々な面で大変だが、内容が充実しており苦ではない/家庭や仕事の都合など、授業を受ける上での困難さは多々あるが、それでもここに来ることができ沢山の経験。心から感謝/社会人になって学ぶ場が確保できていない部分もあるため、非常に貴重な場/対面ならではの良さがあると思う/働きながら学ぶ身として、放送大学がこのような門戸を開いていることに心から感謝/ここに来てようやく「同級生」や「同期」の感覚で付き合っているつながりができたと感じる。通信制の大学では、なかなか学習共同体を作るのは難しいのだろうと思っていたが、それが実現され、きっと今後も繋がっていける仲間ができたことをとても嬉しく感じる/通信制大学は自分のペースで学習できる反面孤独な戦いでもあったが、ここに来て同じ目標に向かう仲間が出来たことはとても価値がある財産/放送大学の放送授業は視覚と聴覚からしか情報を得ることができないが、心理演習・実習では五感や空気感など自分の感覚をフルに使って情報が得られ、気づくことや学ぶことが多い/放送大学での座学は各教員の経験談を含め、教科書よりもずっと生きた知識を学ぶことができ、毎回興味深い/他の学校よりも充実した内容になっていると思う</p>

項目	2024年度(3期)	2025年度(4期)
「心理演習」 「心理実習」 の授業全体 - 授業で 得た気づき や葛藤	・社会復帰とはその日常の基準を社会とすり合わせていく作業だと考えられる。しかしそのためには被支援者が自分の日常と一般社会とのギャップに向き合う必要があり、その辛さは一般社会の日常から出たことがない人には想像が極めて困難。その辛さに立ち向かう、もしくは和らげるために両方の世界を理解した上でできる限りの最善策を行う、そのための仕組みを作り守っているのだと感じた/こころの専門家としての視点を強く意識する内容だと感じた。自分のこころの動きを「ものさし」として用い、「わからないこと」や「違和感」などを手がかりとして使うなど通常とは違い、こころの使い方の訓練なのかと/自分が考えたり、感じたりしていることを言葉や文字にすることの難しさ。特に新しい経験の最中や直後などは、感じたことの鮮度が良いような生き生きとした感じがあり、言葉で表したいといつも感じる。しかし生き生きとしているからこそびったりと合う言葉が - 中略 - 時間をおくと考えがまとまる部分がある反面、特定の記憶に残った事柄しか思い出せておらず、その瞬間に感じていたはずの大部分の言語化が困難なものが抜け落ちているような感覚も。感じたことの言語化についてスキルを身につけなければと授業ごとに感じる/選抜試験に挑戦中の間の自分の生活の変化によって、「そもそも自分は将来心理専門職になるのか?」という根幹の部分に迷いがある状態で臨むことに。だが、だからこそ逆に「大学で心理学をやっていたから相談にちょっとのれる人」と「職責のもと心理支援・アプローチを行う心理職」の違いについてより意識してできるようになった面も	・自分と他人の心に触れることの難しさも感じる/実習先の選択肢が幅広く、また講義の際に、大学院の授業のような(大学院のM1で学ぶような「心理臨床とは…」「臨床家とは…」という部分について)話を伺え、貴重な学び/先生方がふと口にした言葉に印象的なものが多く、授業を終えてから次の授業までの間に、それについてあれこれ考えている。頭の中にいつでも取り出しやすい位置に、心理演習・実習での出来事が置かれている感じ/心理職としての実務経験を重ねた先生方の話から、人が人と向き合い、関わっていくということは、学び、考え続けるということなのかもしれないと感じた
「心理演習」 「心理実習」 の授業全体 - 自身への 問い・振り 返り・内的 変化	・今までの自分の価値観が覆ったり、無意識の偏見に気づいたりして、自分自身を振り返る機会が多く、自分には心理職としての資質があるのか迷う部分も多々/ここにきてもお覚悟ができていない自分の弱さを思い知らされた/すべての過程がカウンセリングのよう/色々なことを考える機会となっており、今一度自分という人間を振り返る機会にもなっている/今後進学するためには、私の心身の問題を先に解決せねばならないと感じた/受講する前は、心理学の勉強が好きなので大学院に進学して勉強を続けたいという漠然とした自分本位な希望を持っていたが、見学を通して、臨床心理学は誰かを理解し、支援するために勉強するものだという目的意識を持てるように	・「心理演習」「心理実習」で自分と向き合う時間を得たことが、日々の臨床への姿勢を振り返る場にもなっている/心理の現場を知りたいと意義込んで参加した心理実習だが、いつの間にか視点が変わるのではなく内界に移り変わっていることに毎度驚かされる/自分自身や自身の進路について考えさせられる事がとても多かった/心理演習・心理実習は単なる座学とは異なり、自分自身と向き合う時間になっている/授業内外で学びや情報収集に対してより能動的に行動できるように/先生の講義、実習先での見学と心理職の方々の話により、心理職の魅力と容易でなさを両立してイメージできるように/興味を持ったものには、積極的に自分から動くように意識
「心理演習」 「心理実習」 の授業全体 - 不安・葛 藤等	・自分に支持的な関わりができるのだろうかという葛藤や、心理学を学んで楽しむことと、現実的な制約の中で実践することの落差を感じた/授業から自分が学ぶべきことを確実に学べているかは不安。特にグループディスカッション・プレゼンテーション・レポート作成では自分の力量不足を感じる/地方から出てきて、素晴らしい先生方や学生方と一緒に過ごすことで、初めのうちは特に気圧されてしまった/いつも質問できず反省。若いころは勇敢だったような気もするのですが、色々考えてしまっただけ	・受講者の中には、すでに心理職として働いている人もおり、話を聞いているだけで面白い。でも、実践的な話のときは、ついていけなくて少しへこむ/スケジュールがタイトで息吐つく暇もないですが、共に学ぶ受講生の存在や先生の優しさに支えられて、なんとかついていっている/自分を律する修行のよう/文字や絵を書く・描くことが非常に苦手であり、模造紙に共同作業で結果をまとめて発表する作業を苦痛に感じています/大学院入試が始まったが、周囲の若い通学生と試験会場にいと、「この人たちはもしかするともっと厳しい演習実習を経験しているかもしれない。勝てるのだろうか?」と不安に/実習・演習を受講して、心理職の現場や心理職がどのように心と向き合っているのか、その根幹となるころに以前よりも近づいているはずなのに、逆に今までよりも遠くに感じる事もある/最初の授業で、「自分について知る」とこの授業の趣旨だと話されていたが、自分と向き合うことがやっぱり私にとっては一番難しいようで、いまだにうまくできていないのかわからない/実習で得られたものや体験内容を他者と比較してしまう
「心理演習」 「心理実習」 の授業全体 - 横のつ ながり 同期の存在	・同じ授業を受けている学部生の方々については色々な立場の人がいて、全国から集まっている人たちとともに講義を受けるのは楽しい反面、知識や考え方に差があり戸惑うことも。こうした体験がすべて大学における学びだと考えている/心理演習で同じ心理学を志す他の学生との関わりを持ちながら講義を受けていると、人間には人との関わりが必要だと実感/他の受講生の考えや視点、バックグラウンドや進路の話は毎回聞くたびに大きな刺激を受けている。時に、それが大きすぎて重さを感じたりする/共に学んでいる仲間たちのすばらしさに打たれる/自学としても実り多い体験ですが、学習仲間との共有の時間について20、30分話すだけでもその数倍の実りがあると実感/クラスメートとともに授業を受けることにとっても刺激を受けている。様々なバックグラウンドを持っている方たちとディスカッションをすることで色々な視点に気づくことが出来るのが面白い/	・今までずっと独学で「心理学」というものを勉強してきたので、在職の心理師の方々や同じく「心理学」を学んでいる学生と交流し、話ができただけでとても得がたい経験/共に学ぶ受講生の方も、様々なバックグラウンドや年齢の方がいて、授業の合間の些細な雑談においても刺激を受ける/志を同じくする受講者の方々と一年を通して頻繁に会い、同じ実習・演習に参加し、話をし、互いの思いや展望を聞き合うことから得るものが多くあり、大変ありがたい機会に/多様な背景を持つ年代も様々な学生の方々と一緒に学ぶことで、自分では気づけなかった視点での気づきを聞くことができ、集団で学ぶことのよさを感じている。同時に年齢や職歴によるパワーバランスの違いを感じることもあり、同年代学生が大多数を占めていた大学生時代の違いも感じている。同様に、自分自身が無自覚に周囲の人に及ぼしてしまっている影響についても気になっている/

項目	2024年度(3期)	2025年度(4期)
	<p>他受講生の方の学ぶことへの意識の高さには感服。私の仕事のことでもあって、知識や前提が大きく違うという感覚を持つことがある／メンバーもバラエティ豊かな方で毎回刺激をもらっている／同じように心理職について学びたい方々と一緒に学ぶことが大きな刺激／集まった30人のメンバーからも良い刺激を受けるとともに、共通の想いを感じ一緒に学ぶことが嬉しい</p>	<p>同じ志を持つ受験生たちとのグループワークやディスカッションを通じて毎回新たな視点や気づきを得ることが出来、大変刺激になっている／皆とても熱意があり、私も刺激を受けている</p>
<p>「心理演習」 「心理実習」 の授業全体 - 日常生活との関連</p>	<p>・授業で得た知識を身近な人間関係にも生かし、心理支援の現場での経験を積み道を模索していきたい／「人はどう生きるか」という哲学的な命題から、日常生活のほんの一部に瞬間的に立ち現れる心の動きまで、非常に幅広い次元を行ったり来たりし、同時並行したりしているのだなと気づき、心理専門職の難しさを知った</p>	<p>・改めて支援の基礎を学びなおすことで、日々の業務の中で行ってきた自分の対応を振り返るきっかけに。忙しさの中で後回しになりがちだった、自分の感じ方や考え方に目を向けることができたのも大きな収穫</p>
<p>「心理演習」 「心理実習」 の授業全体 - 授業レポート</p>	<p>・言語化の難しさを痛感している／授業後のレポートについても直後に書いたものと、振り返って感じることは違うなあと毎回後日に返してもらってから気づく／返していただいたものを読むのにも少し重さを感じることもあるが、このレポートがあることで再度考えることが出来るという気も／文章にするのに時間がかかり、中々まとめるのに苦労／毎回レポートや実習ノートを書く際には筆が進まず「自分が感じたことを言語化し、文章化する」という経験を積みながら来なかったことに気づかされた／レポートを書くときは、時間に追われて焦るし、頭の中から話題や言葉を絞り出し、大変だと感じるが、だからこそ必要な実習なのだろう。回を重ねることで苦手感がなく書けるようになることを願う</p>	<p>・一見するとただ感心して理解すれば済むようにも思えるが、レポートを書くためにはそうはいかず、現実に存在する実態を学びながら、その背景や意味を探り、深く考え続ける必要があった／毎日のレポート作成は、簡単なものではないが、自分自身と向き合う機会でもある／毎回一日の終わりに課題があるのは大変だが、書き上げるためには授業（見学）中ボーっとする余裕などなく、おのずと授業（見学）に集中する事が出来ている気が／記録の重要性についても深く考えさせられた。記録は単なる業務の一部ではなく、支援の意図や経過を言語化し、他者と共有するための大切な手段であることを再認識／授業後のレポートの作成は、書くことが苦手な自分にとっては時間内に考えをまとめ、用紙いっぱい書き上げるのに苦労しているが、良い修練の機会と思い、取り組んでいる</p>
<p>「心理演習」 「心理実習」 の授業全体 - ディスカッション シェアリング等</p>	<p>・ディスカッションやフィードバックの機会では、協働することの重要性を再認識し、同じ現場を見ても異なる視点で物事を捉えることが出来ることを学んだ。この経験により自分一人の視野が限られていることを実感、意見交換がいかに重要であるかを認識／同じメンバーで長期にわたって一緒に授業を受けるというのは、放送大学ではあまりできない体験。一般の学校のように楽しい。小グループに分かれて作業や話し合いをすることが多く、私にとっては苦手な作業を買って出る人、思いもよらぬところへ目が向く人がいたりして刺激を受け、感じ入ったりも。顔を合わせて、コミュニケーションを取ることで何かが生まれ、進んでいく。チームで仕事をしていくための大切な実習／仲間は全国から参加しており、そのバックグラウンドも多様。いくつかのグループワークがあったが、普段の仲間とのコミュニケーションの仕方やタスクへのアプローチ等が異なり、より大きな多様性を経験。心理専門職が対象とするクライアントという視点からとらえると、これも大きな意味があると考え、自分の人としての幅を広げるためにも多くの方々と関わるようにしていきたい</p>	<p>・様々なバックグラウンドを持つ参加者の方々から得られる学びも大きかった。グループディスカッションによって得られる気づきは、ひとりで考えただけでは得られない多様なものであった／他の受講者の方達からも、色々学んだ。ディスカッションやチームでの発表の時など特にそう思う／授業形態に関し、グループで話し合い、内容を纏め、発表する機会が多々あるので、チームで活動するという観点からも良い訓練になっている／他の参加者の意見や視点に触れることで、自分にはなかった考え方を知ることができ、非常に刺激的で学びの多い時間／グループ学習では、一緒に学んでいる皆の考え方や視点を知ることができ、自分自身の視野を広げることができる／グループ発表では、相手にわかりやすく伝える・説明することの難しさ、重要性について勉強</p>
<p>「心理演習」 「心理実習」 の授業全体 - 終了生との交流や進路</p>	<p>・さらに深く知って、自分もプロになってみたいという思いが強くなった／心理専門職として働いてみたいという気持ちが強まっている。大学院に入学しても、資格を取得しても就職しても学び続ける必要性を教えてもらった／今後の自分の進路選択、学びの方向性、自分なりの適性など考えながら、貴重な機会をとらえ積極的に取り組んでいきたい</p>	<p>・一期以降との懇親の場があれば足を運びたい／放送大学での過程を経て、大学院進学・修了した方を招いて話を聞く機会があれば、受講者にとって良い場になるのでは／通信制大学は通学型の大学と異なり、生徒間や先輩との交流が作りやすく、情報がなかなか得られないことにもどかしさを。これまでの講義を受けた先輩方がどんな職種、どのような進路を進めたのか、自分の進路を決める際の参考にできるような情報が得られるとありがたい</p>
<p>「心理演習」 の授業全体 に関連</p>		<p>・最初の授業で、受講生同士接する機会（ワーク）が多く設けられていたことは、私にとっては助けに。これから1年を共にする他の受講生と打ち解ける突破口が開け、教室に居場所ができたように感じられて、以後の授業に臨みやすくなった／演習の中での先生方の実体験に基づくエピソードが面白くかつ有意義で、毎回の授業の楽しみに</p>
<p>「心理実習」 の授業全体 に関連</p>	<p>[見学実習に関する感想（一般）] ・普段見学できない場所の見学は有意義／「この授業を受けていなければ行く機会のない場所に足を踏み入れて、新たな体験をできることは貴重な機会／今まで対人援助の業務経験がなく実習というものはじめてだったので、実習先で現場の雰囲気や肌で感じる事が出来、また臨床場面の先生方のお話などどれも大変貴重な経験／実際に心理職の方が勤務している職場を見て、聞いて、肌で感じる事が出来て大変貴重な経験が出来ている／テキストでの勉強と違い、実際の現場を見て、働いている心理職の方の話のを伺えることは大変勉強に。やはり現場ならではの「場」の</p>	<p>[全体的な感想] ・「心理実習」は、見学の視点や心構えについて手厚い事前指導が。それを手がかりに見学実習に能動的に望めているよう実感／心理専門職が働く様々な分野について知ることができ、今後の進路についてイメージを作りやすくなった。／心理実習に臨むにあたり、特にどの領域に進みたいかを明らかにすることを一つの目標としていた。同日標を念頭に置きながら、取り組みたい [見学実習に関する感想（一般）] ・学部段階で、医療領域以外の見学実習に行く機会をいただけることは珍しいことだと思うので、今後の実習でもそれぞれの領域</p>

項目	2024年度(3期)	2025年度(4期)
	<p>空気のようなものもあり、言葉にならないところもあるが、肌で感じるものもあった/見学を通して心理検査の重要性を感じた。面接や観察も重要でだが、心理検査はやはり心理職が専門とするツールなのだと改めて感じた/授業を受ける前はクライアントの視点でしか物事を考えられないことに悩んでいたが、見学を通じて支援者の視点の重要性を感じる事が出来た/見学を通して実習生の今しか見られない景色があることに気づき、自分の立場を変えることで見えるものが大きく異なることを学んだ/見学先で話をしてくれた公認心理師の方々からは聴く能力だけでなく話す能力の重要性も痛感/選択式の実習がいくつかあるが、一つだけではなく、もっと実習に参加できると勉強になりそう/貴重な機会を得てうれしく思う反面、見学で自分がどれだけ理解を深められるのか不安/見学では今までほんやりと知っているだけだった心理職の仕事の具体的なことが出来、また、これまで履修した科目で学んだことが実際の現場にどうつながっているのかということ意識することが出来た/実際に現場に行き担当の方の話や話を聞くことが、施設の特色や心理職を理解することにとても役立つと実感/過去に実習に行ったことがある現場を知らなかったのか、それぞれの実習先で、心理職が何を考えて働いているのか、生の声を聴けたように思っ、それも進路を選ぶうえで良い経験となったように思っ/インターネットで調べたり、文書から得たりした印象とはかなり違い、驚いた。情報を集めることはとても大事なことであり、必要なことだが、実際に自分の目で見たり体験することで、対象に対する理解を大きく深めることができるものであると感じた。/見学を通して、実際に心理職として働いている方の様子を知ることができ、それぞれの方が心理職としてのアイデンティティを模索する中で、積極的に行動しながら仕事に取り込んでいる姿勢も参考に/現場の実習においては思った以上の緊張感があり疲労困憊になりましたが、通常はできない体験を学生としてできた/見学実習では考えがおよばなかった現実を知ることになり、行く事が出来て知識がプラスされた実感を覚えることが出来た/病院での公認心理師の職務内容の理解を深めることができ、意識されていることを伺うことで自分の視野も広がった部分も。司法領域で働いている方にお会いする機会は通常ないことな貴重な体験</p> <p>[見学実習に関する感想(放送大学に関する)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでテキストでしか知りえなかった、あるいは全く未知の実現場をみられるという体験は私にとって非常に刺激的。私の中の心理職の概念を形成したりまた崩したりを繰り返すうちに心理職としてありたい姿や、その姿に達することの難しさ、時間的な有限性に伴うキャリア選択の葛藤などについて、考え、感じている <p>[現場の心理職の話・立ち振る舞い等に関する学び]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現場で臨床活動をされている方々の話を聞くのは、刺激的。ただ毎日業務をこなすだけではなく、自分の専門性を活かすために試行錯誤をしながら、自らの立場を広げ、確かなものにしていくプライドが感じられた/どの現場でもクライアントは思った通りに良い方向に進んでいくことはなく、結果が努力に必ずしもついていくものではない、そんな中でも準備を怠らず、新しい知見やスキルアップに臨む姿を見て、覚悟と、支えあえる仲間が必要だと感じた/実習先で実際に心理職として働かれている方から、直接お話しいただけるのもまたない機会/見学先で生き生きと仕事をされている心理職の方と会えるのは、励みに。自分としては心理職はいつも処しきれない問題を抱えていて、心がモヤモヤしているイメージ/全く知らない分野で働く専門家の姿を見ることで、自分の持つ心理職に対するイメージが非常に限定的であったことを自覚。進路について改めて考えるきっかけに <p>[見学実習による気づき・自身への問いかけ等]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が実際に働いている状況をリアルに想像することが出来た一方で、果たして自分に可能だろうかという気持ちも/現場で心理に携わっている先生方や実習先の担当の方々の話から、人のことと関わるといことがいかに微細な感受性と知性を必要とするのかということ強く感じた 	<p>ならではの見方・考え方をしっかり学べるよう努めていきたい/実習先では現地の職員の方のお話も直接聞くことができ、普段どんなことに気を付けて仕事をしているのか知ることができ、実際の見学を通して多くを学んだ/全く接点の無かった施設を実際に訪問し、そこで働く人々から直接お話を伺うことで、現場の空気感も含め、心理臨床の最前線について、その一端ではあるが感じることができた/実習先によっては少人数のグループになるのが当初は心細かったが、いざ始めるとかえって責任感が強まって意欲的に実習に臨み、参加者同士の連帯感も芽生えたように感じられて、結果的にもとても充実した見学実習に/普段訪れる機会がない場所への見学ができ、大変刺激がある/心理職の見学実習は、今までにない経験で勉強に/精神病棟や少年鑑別所等の施設内に入れて頂き、その空気感まで体験する経験というのは、自身の生活の中に自然には、まず得られないだろうことで、大変貴重な経験である/今まで活字情報として知っていただけの現場の実態を見学できていて、むしろ同じ領域を2ヶ所、3ヶ所とちょっと色々経験したくなった。そういう意味では、選択実習を追究選択できたことは大変うれしかった/受講して私が一番感じたことは、肌で感じることの大切さ。現場で働く心理職の方の生の声やその場の雰囲気は、座学よりも大きな学びがあり、「すっ」と深く頭と心に染みわたった/心理実習の際に、リワークに参加するメンバーさんのあたたかな気遣いを感じたり、少年鑑別所の畳の香りから、そこで生活する少年のことを想像したりなど、体験しなければ得られないものばかりだと思っている/現場で働く方の話や振る舞いからも、言葉にしつけない学びを得ている/現地実習はあつという間にすぎている、正直ついていくのでいっぱい、帰ってからもう少しこうすれば良かったと思うことが多い。講義の中で繰り返し先生方が言われていたことを現地実習でも経験し(持ち物の管理の大切さ、施設の厳重さ、メモの取り方等)、今後もこの授業の一つ一つを大切に経験して行きたい/心理職の仕事現場ならびに関連施設の様子を知ることができ、大変貴重な機会と感じている/想像していたものは相当異なっていたので、現地見学は「百聞は一見に如かず」を体験するものだった/見学前はマナー・心構えから指導があり、当日大きな心配なく見学に臨むことができた/普段は見学できないような施設の中で実習を行うことができるので、本当に貴重な経験をしていると感じる。現職で子どもと関わる仕事に就いているので、少年鑑別所の中に実際に入って子どもたちが生活する場所を実際に見られたことは、自分の知見を広げることにもつながったと感じた/病院や少年鑑別所など、実際の施設を見学できたのも重要な経験でした。その場所の役割について、ほんやりとした知識による理解だったものが、少しクリアになった/実習では見学だけにとどまらず、患者さんと接したり、事例検討など実践に則しており、自分自身がどの分野に興味があり適応可能か等想像しやすいつと感じている</p> <p>[見学実習に関する感想(放送大学に関する)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習先の領域が5領域すべて網羅されている過程を持つ大学はなかなかないと思うので、これ以上ない環境 <p>[現場の心理職の話・立ち振る舞い等に関する学び]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習では、施設ごとに異なる心理職の働き方を知ることができ、心理職の多様性と一貫性、そして自分の関心や着目点を見いだすことができた/施設の実習担当者の方が、とても丁寧に教えてくれるので、本当にありがたい <p>[見学実習による気づき・自身への問いかけ等]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見学実習時や勤務場面において「こんな時、もし自分が心理士だったら」と想像する回数が増えた。そして、心理職に不向きな自分を認識する回数が増えた

(2025年11月21日受理)